

英文概要論考

岩城谷 滋

(去年の紀要に発表した「英語教育について最近考えること」(本校研究紀要「高校教育研究」第37号)は、この原稿の前半をなすものであり、『3. 英文概要の展開はいかにあるべきか』まで論じたものであった。今回はこの後を引き継ぐ後半に属するものである。)

4. 英文概要の掌握はいかにあるべきか

いわゆる随筆、論文、見解、所見、回想録、知識や学術の解説あるいはその纏め、紹介、状況報告、伝達、分析、調査、命令等の中では、その種類にもよるが、おおむね論文というものにまとめられるようないわば難解な文面の多いものは、小説、印象記、日記、紀行文、懐旧談等と比較する時、情緒的な部分よりは、むしろ固い思想的な部分の方がずっとその領域が大きいことは誰も異論のないところであろう。難解な抽象的な局面が幾多重なって展開される時の読者側の読破の至難な心象については、今更あれやこれやと述べるまでもなく苦痛の極みであろう。論旨がどう展開しているのか、どう互いの局面が関連しているのかといった問題点もさることながら、そういう事柄よりも、一体全体その難解な文面が何を言おうとしているのか、その訴えたいところはなんだろうか、と読んでいる最中に苦悶する場合がしばしばあるとしたら、読書の意欲はそこでかなり減殺されてしまうか、苦渋に充ち、逡巡の余り、他の関心に興味の眼が奪われてしまうかするであろう。殊に英文の難解な抽象的な文面に遭遇すると、この感はずいぶん強いであろう。しかし、翻って顧みると、日本文にしろ、英文にしろ、書かれてある事柄は、表現の違いこそあれ、扱われている内容そのものは、同じ人類の考える事である以上、表現の仕方、方法等がその国民性によって多少違うという点は別として、そんなにたいそれた相違はあるはずがないと考えるのは至極当然であろう。

一般に筆者が読者に訴えたいと考えていることは、終始一貫した連綿と続く思想もさることながら、一局部的な小さな場面における思考も含めて、心に浮かぶ全体的な映像そのものは、押し並べて、鮮明なビジョンかそれとも漠然としたものであるかのいずれかであろう。日頃考えて到達したテーマであれば、それは鮮明なビジョンとなろうし、到達まではいたらなくとも、苦悶しながら反芻しているうちに漠然とながら、曖昧ながらも筆を進めていくうちになんとかなしに考えが整理されて、曖昧さから鮮明さに移行して行く過程をたどる未熟なビジョンもあろう。この二種のビジョンの発表の段階を考えてみると、未熟なそれを臆面も無く表出することが簡単に許容されるほどの甘さは世間には無いであろうから、もしその姿を取って世に出されるとしたら、それはよほど世間から期待されたものであるか、それとも切々と世間に訴えたい意欲と自信に後押しされたものであるかのいずれかであろう。これに対して鮮明なビジョンのそれは、世間に訴えなければ止まない並々ならぬ意欲と必然性を自覚したものであろうから、心の中に強烈な情熱があるに違いない。しかしながら、いずれにしても、心の中にあるそのビジョンそのものは、表現されて読者を納得させるに到る文章の一部始終が予め全てに渡って用意されているものではないということについては、誰しも異論のありようがないと言っても過言ではないであろう。部分的には、構想を練っている時に、勿論、心の中で、その文章までも詳らかに想像されたり、推敲されたりすることは無いとは言えないが、それはあくまでも部分に過ぎない。

しかし、これら二種のビジョンのほかにも、そのいずれにも属さない、いわゆる俳諧的な随筆といったジャンルに属するものがあるであろう。その随筆にもいろいろな種類がある。日頃感じ、思っている心の中の信条や、大袈裟に言えば、摂理、人生哲学と言ったものに抵触するような現象が眼前に現れると、その現象を自分の心に照らして考察を反芻する時に、それに対する見解はかなり簡単に出てくるというものである。これを論ずれば、それはすなわち立派な随筆となって行くであろう。しかしその所業に関しては、その人は、その人の持つ論理でもって、新しい人生観を生み出すほどの度量と才気がない場合であれば、それが非常に多いのだが、問題はむしろそのこじんまりした纏めに満足するその人の人柄に、人間らしさを覚えさせる暖かさが提供されるのである。つまりすでにある物の見方に照らして新しい現象を、あるいは珍しい現象を如何に受け入れて、如何に判断するかに大きな関心の度合いが寄せられるのである。これに対して、俳諧の随筆の形をとりながらも、鮮明なビジョンを展開する場合があるが、そうした場合は勿論前記の範疇に属するのだからここで論ずる対象とはなりえない。いわゆる「はみだしの論理」というのがあって、それはまさにどうでもいような事柄をとくどくと論じている場合であって、論旨からすると、切り捨てるかスキップするかして、無視して差し支えないものであるが、そういった部分をもそれなりに整理しながら読みこなす時、それはむしろ可愛い部分として許容し、対処できるようにもなる。

さきほど、図らずも構想を練ると言ったが、この構想を練ること自体がすなわち自からの持つビジョンを相手方に、すなわち読者に、いかに訴えて納得させるかの腐心の姿にほかならないのではないのか。世にいかにも多くの人達が、研鑽、学識、知識、経験等が豊富にあって、訴えたい事柄を持ちながら、その訴える術が無いのか、それとも未熟な段階を出ないために、あっても貧弱なために、あるいは、構想を練るだけの教養と才知にたけていないが故に、単純な手法、すなわち、説明の連続に終始し勝ちになって、たち消えになってしまっているケースが如何に多いことがであろうか。説明の連続は、論旨の展開の視点から見ると、不必要な部分に属しており、説明の連続の果てに論旨の展開などありようがないのである。この意味で漫然と文章を連ねるだけの、それも一日の生活のあるいは一事件の事の顛末を単に羅列するようにならざらと説明し続けても、そんな文章はなんら相手を引きつけないことは当然と言うほかない。説明は必要にして充分なものでなければならぬ。それ以上は不要である。では、どこまでが必要なのか。またどこまでで充分なのか。これらの問題は、表現したいとする側の論陣の要求する領域の問題でもあり、また、論旨の展開について容易に納得が得られないほどに際立って新しい内容であればあるほど、説明の量も増大せざるをえないこともあるであろうから、そう簡単に決定的な姿を明示することはできない。そこに相対性があると言って良い。唯一の足枷として最底の限界というものが考えられるとしたら、それは論旨の展開を進めるに当たって、読者の側がその論旨を受容しながらも不合理な点を発見したり、反論や反発はあっても、どうしても疑念を抱かざるをえないような展開であれば、それこそそこにおいて、説明が絶対に必要であるといった条件になってくるのではないのか。しかし、くどいようではあるが、そのような説明の部分が文章中にあらうとも、それが、論旨の展開には何ら関係がないことは、ここで留意しておかなければならない。つまり、論旨をいかに掌握するかという大きな問題の最も容易にその解決に向かう決定的な手掛りは、この説明の部分を、文章中にいかに直截にかつ明確に発見するか、つまり発見する能力が備わっているかに、掛かっていると言えよう。しかし、そういった説明部分だけを除外すれば、問題の論旨の掌握が全て解決できるのかといえば、そうではない。問題はそんなに簡単に行くわけがない。まだまだ他に除外しなければならない部分があると考えられるのである。

ここで論旨の掌握に除外の手法を取り入れたそもその理由を明確にしておかなければならない。勿論、論旨を掌握するのに、いわゆる直観力に頼って判断する方法が真先に上げられようが、それによって目的が果たされる段階、あるいはその容易さの範囲以内の程度であれば、こんな簡単なことはなく、別に問題とするだけの必要さはないのだから、それはそれで良いのであろう。ところが、直観力だけに頼って読破を試みても到底その内容がつまり論旨が掌握できない場合に遭遇する時に、一体どうすれば良いのか逡巡するケースがある。こんな場合に、局面を打開するためにどうすれば良いかが当然のことながら問題とならざるをえない。ここに除外の論理が介在することとなるのである。それは、言ってみれば、直観ではなく冷静な技術的な整理の手法を適用しようとするかなり荒っぽい姿勢に依存することであるが、しかしそれによって、問題の解決に向けて、論旨の掌握は的確にその距離を短縮してゆくのであるから、これまた、これはこれで良い手段だと見做さざるをえないのではないか。このような除外の論法を前面に出すやり方は、必ずしも当初から何がなんでも適用しなければならないとは決して考えているわけではないことは言うまでもないことである。

さて、話を元に戻すとして、かの説明部分については、あのような種類の説明だけしかないのだろうか。そのほかにないであろうかと考えてみなければならない。上記のように述べてきた説明の種類は、言ってみれば局面の打開と密接な関係があると言わなければならない。つまり説明がなければ、次の論旨へ展開が進まないわけであるから、その局面の打開が順当な方向に流れるものであれ、逆に反対の方向に流れるものであれ、そのいずれにしても説明の設置が必要であるわけである。そうしたもののほかに、文章そのものを考えてみると、その中にいろいろと論旨には不要な部分があるはずである。それはすなわち、いわゆる修飾部分である。修飾部分とは、文章の中の意味の纏まった語（または語群）と語（または語群）の間に修飾の関係を持つ部分であって、修飾する側の語は修飾される側の語をよりわかり易くするための説明を付加する役目を担うこととなる。この修飾もまた修飾される側の語（または語群）が相手にまたは読者にあるいは聞き手にわかって貰えない可能性があるやも知れないと言った不安感があればこそ、あるいは、それを置かないと絶対にわかって貰えないと考えればこそ、そうするのであって、逆の読者の側から、あるいは聞き手の側からして、先刻承知するところの語（または語群）である場合もあれば、そうでない場合もある。具体的、決定的な局面を伝達しなければならないがための修飾の部分である場合があるというものである。それにしても、修飾は、やはり語（または語群）の説明であることには間違いがないわけであるから、これまた、説明である以上は、前述の除外の論法と同様に省略の対象となりうるのである。説明にもいろいろあって、この外に挿入だってあるだろうし、また、同格の説明だってあるだろう。挿入の全てが説明とは限らないが、説明とならない挿入部分は、論旨の展開からすると、やはり無視しても影響を与えるものにはなりきれないことは言うまでもない。このように考えて行くと、いわゆる長文の難解な文章といえども、省略できる部分の発見の操作をたいして苦労無く行う能力があれば、あるいはその能力を養って行けば、経験を積む程に次第に直観的にこなすより優れた能力へと変転して行くことであろうし、そうなれば、文章のどの部分に重点を置きながら読んで行くかということも、随分と容易になるわけである。読むほどに取捨選択を重ねつつ読むほどに理解を得て行けば、論旨の掌握はかなり簡単なこととなるはずである。

つまり、判断の根拠は、別に難しいことを言っているのではないのであって、いわゆる説明とは何であるかを根本的に考えてみることに拠っているのであるということである。

以上を今度はより具体的に英文章そのものについて考えてみよう。状況描写とか状況説明といった部分から文章を書き起こすような、いわゆる小説とか物語とかエピソードとかいった文

章については、今ここで論ずる対象とはしないで、それからは除外して、何故なら、そのような文章は、いわゆる論文とか随筆とかいったようなものとは違って、想像がかなり容易な場面の描写に属するのであるから、ここで対象としたいのは、論文とか随筆といったものに限定して、その難解な抽象的な文面の多い掌握し難い文章を扱うのである。

一体に論文とか随筆といったものは、文章の出だしが絶対に見逃してならないいわばキーセンテンスでおおむね開始されていることである。これは英文章のほとんどその多くの場合、そうである。勿論若干の例外があることは認めるが、そのことについては後ほどに触れることとして、今は、多くの場合の例について述べてみようと思う。論文とか随筆といったものは、筆者なり話し手なりが相手、すなわち読者や聞き手に訴えたい、伝達したい、もし許されるならば、賛同を得たいと願って、あるいは同調を期待して、その日頃考えているものとか、苦心して発見したものとか、研究の末に到達したものとか等々を展開しようとするものであるから、わかり易く述べようと考えてはいるものの、その人に備わっている教養とか学識、経験等に影響されながら論陣を展開しようとするのであるが、そもそもその出だしというものは、相手方の収容性の段階にも影響されて時として理解し難い面をはらむ場合もありながら、それでも先ずは何について論じたいかを明確に伝達しようと計らっていることには間違いがないのである。今、何を一体伝達しようとするのか、そのことを明確に論述出来ないでは、絶対に相手方の関心、興味を呼ぶことにはならないということについては、今更くどくど述べるまでもないのではないか。前回の紀要の中でその「3. 英文概要の展開はいかにあるべきか」について論じたが、そもそも論文というものは、幾つかのパラグラフから成り立っているものであり、それぞれのパラグラフの中には一つの言いたい中心的な思想があり、それが多くの場合、そのパラグラフの最初の出だしに、すなわちキーセンテンスとして最初に出ているのである。だから、読者または聞き手はこのところを見逃したり、無視したりすると、あるいは不注意にもスキップしたりすると、論旨はその途端から曖昧とならざるをえなくなり、筆者のあるいは話し手の主旨を掌握するに至らなくなるのである。ところで、このキーセンテンスの後にはパラグラフとしては、そのパラグラフが終末を迎えるまでには未だ何行かの残りの文章があるわけであるが、つまり次のパラグラフに移るまでには未だ数行の残余の文章があるわけであるが、それらはこのキーセンテンスとはどんな関係にあるのであろうか。そのことについても論じないでは、いわば論旨との関係も曖昧化せざるをえなくなるといわざるを得ない。すなわち、キーセンテンスの後には、そのキーセンテンスが受け入れられるためにはその説明が補足がなければならないと判断した場合にそうするであろうと考えられるが、そうしないことには相手方の理解が得られないと判断したことによってそうするのである。逆に相手方、すなわち読者か聞き手の方がそのように受け止めることが肝要であると考えられるのである。面白いことに最初のパラグラフがその終末を迎える頃合になると、文章は次のパラグラフへの移行に関係のある部分を用意しながら、すなわち次のパラグラフへの橋渡しをしながら、次のパラグラフのキーセンテンスへ論旨が移行するのである。すなわち第二のパラグラフは第一のキーセンテンスと密接な関係を持ちながら展開するのであるから、これまたそのキーセンテンスを明確に把握しないことには、論旨の展開が如何に進行しているのか掌握出来たものではない。肝心なことは、等二のパラグラフのキーセンテンスを発見したら、その意味するところが先の第一のキーセンテンスからどのように論旨が展開されているかを明確に関係づけて掌握して行かなければならない。このようなことが次の第三のパラグラフ、また次の第四のパラグラフ、そのまた次の第五のパラグラフへと繰り返されて行く時、論旨が掌握されるのである。しかし、論旨が何時の場合も同様な展開をして行くとは限らないのであるから、各論文に出くわす時には、その都度、その論

文の論旨の展開がいかようになされているかを何時の場合も油断なく鋭意細心の注意を払いながら読破して行かなければならない。

言ってみれば、論文の論旨は、終始一貫してその論調を維持しているのであって、まさか一つの論文が二つ以上の主旨を追求しながらその論調を発展させるようなそんな論文はないと言わなければならない。何故なら、一つのことも十分に論陣をはって言いつくせない、つまり理解を得ることが出来難いというのに、二つ以上のことなど到底不可能と言わなければならない。だから、論文は、終始一貫した論調を維持しながら、一つの主旨をいかに理解させようかと腐心しながら展開しているものであるという判断の下に受け入れようとする姿勢を取りながら読んだり聞いたりする時、読者または聞き手は、かなり容易にその論旨を把握することが出来るようになるのである。

次に、英文の中で、より具体的な削除の対象となる部分の視覚的な発見の仕方について少々論じてみたいと思う。それは、前述した説明部分の削除と比較する時、説明部分の発見には、ある程度の脈絡上の思考と判断とが要請されるのに対して、この視覚的な発見のそれは、かなり直観的な過程で掌握出来るものである。多少気掛かりなのは、ある程度の誤謬を避けるための吟味が必要であるということである。しかし、そのこともかなり直観的ではあるから、それほど気にすることはないとはいえるかも知れない。では、その視覚的な発見とは何か。それは先ず記号で表わされている部分を発見することである。次いで、記号に準ずるような言葉で表わされている部分を発見することである。前者は、いわゆるダッシュ（—）や、コンマ（,）や、セミコロン（;）や、コロンの（:）や、クォーテーションマーク（"）であり、後者は、理由を述べるための接続詞や、対照を表わすための接続詞や、例を述べるための言葉や、懐旧談的な文面を紹介するための書き起こしの言葉である。これらの記号や言葉は、まさに視覚的に発見出来るものであるが、それらのそれぞれの用法については、これから一つずつ説明を加えなければならないと考えている。

先ず第一に、ダッシュであるが、これは、その直前の語もしくは語群について、補足的に、あるいは敷衍的に説明しようとする部分であったり、あるいは、その同格的な働きを持たせた語もしくは語群を添えることによって、追加説明しようとする部分であったりするから、いずれにしても読解または聴取する場合にいわゆるスキップするか看過しても論旨の掌握には何ら関係がないと言って差し支えない部分である。このダッシュの記号は文中にある時は、その説明部分の前後にこの記号があるから、一目瞭然であるし、また文尾の方であれば、その記号は一つしかないけれども、これまた一目瞭然であるから、その発見はまさしく視覚的と言うほかない。

コンマもまたその扱い方、その位置ともにダッシュと同様に使われるのであるから、これまた視覚的に簡単に発見が出来るというものである。ただコンマは、このことの外に、いわゆる一般的な用法としてのコンマの本来の用法があって、そのことと混同など起こりようがないとはいうものの、一応の注意が肝要である。すなわち、コンマは節と節との区切り目の位置に必要な置かれることがあるし、いわゆる挿入の語または語群でも、説明とか同格といった性質を持ったものではなくて、「・・・と私は確信するのであるが」とか「・・・と彼の思っている」とか「・・・ということであるが」とか、「私の知っている限りでは」とか、「よくあることではあるが」とか、「そのことは彼の仕事からすぐわかることではあるが」とか、およそ同格や説明とは関係のない部分の来る場合があるからである。しかしながら、これらの部分ですらも、いわゆる論旨からすると、やはり削除の対照の内に入れて当然と言って良い部分であると考えても良いはずであるから、結局は、一応の注意が要るものの、その用法上の相違を認識

していることで、他は同様に扱って差し支えないと言って良い。

さて、セミコロンであるが、これは、その働きが単一でないところがあるために、出くわした時には、多少の吟味が必要であることが、若干の労苦を要するのであるが、これとて前述のように慣れれば殆ど直観的に判断出来るものであるから、それほど労苦の要るものではない。その働きの第一はダッシュと同様の敷衍と補足である。前に出た語というよりはむしろ語群や文章の内容について説明の必要がある場合に使われており、勿論読者もしくは聴衆の方がその理解を容易に行っておれば、当然その必要性は消滅してしまう程度におけるほどの存在しかないのであるから、これまた削除されうる立場にあるのである。第二の働きはA、B、Cの三つ乃至A、B、C、Dの四つの句ではなく節もしくは文章を接続して一つの長い文章に纏める働きを持つもので、一般的にコンマでもって接続するところを、それに代わって、セミコロンで結び付けているものである。これはA、B、C、Dの各部分が長すぎる時によく使われておる。このような羅列の働きのために使われたセミコロンは、削除の対象とは成り切れないのであるから、そこを瞬時に判別しながら読解するような能力を経験的に積み上げて行かなければならない。しかし、有り難いことに、そのような羅列の連結が使用される場合は、実際のところそうざらにあるのでないから、滅多にないものがたまにでると、その存在は簡単に識別出来るものである。それほど神経に病むようなことはないと考えられる。実際にセミコロンの直後に接続詞の and や but や so 等が使われているのがこの用法の時であるから、実に視覚的に判別はできるものと思われる。第三のそれは、対照の働きである。A、Bの二つの事柄の間に対照関係を置いて、そうすることによって、前者のAよりも後者のBの方をずっと浮き彫りにする効果が生まれるのであって、そのことを狙った表現法である以上、勿論後者のBが論旨の上からは重要であるのであるから、削除の対象は前者のAということになる。この対照関係は簡単に判別できるものであるから、そう労苦は要らないと考えられる。

次はコロンであるが、これは、前述のセミコロンほどにはその使用頻度が無く、大変稀に出くわす記号である。その働きは先ず第一に引用である。引用にも二通りあって、その一つは会話の時の人の名の次に引用されるものであって、他の一つは純然たる引用文の引用の直前に用いられ、多くの場合にこのコロンの次にダッシュがあるので、それとすぐに気付くのであるから、視覚的に判別が容易であると言える。また第二に説明である。それはセミコロンのそれとおおむね同じ働きをし、前の語または語群の説明であるから、これまた判然と視覚的に掌握できるものである。

次はクォーテーションマークであるが、これは、明らかに引用符号を使って、引用したい語または語群または文章を紹介しようとするものである。本来、引用とは、論旨の点からすると、自己の論陣を展開するに当たって、強力な先人の言葉や教訓を補強の意味で添えたり、利用したりするといった働きと、もっと良い意味で言えば、それだけの学識の披瀝によって、自己の文章の高邁さと格調の高さを誇示する効果をもたらす働きとがあるといえるだろう。しかし、そんな引用は、あくまでも引用の域を出るものでないわけであるから、論旨の展開からすると、むしろ不必要な部分に過ぎないとみるほかないであろう。従って、このマークがある時は、殆ど視覚的に削除の対象として、スキップするか無視するかして、一挙に視点をとばすことによって、論旨の掌握に要する時間の短縮に貢献し、またこれを容易にすることが出来るのである。

以上は、英文の中で、より具体的な削除の対象となる部分の視覚的な発見の仕方について、記号を通して発見する方法を論じてきたわけであるが、次は、記号に準ずるような言葉で表わされる部分について論じてみたい。

先ず、理由を述べるための接続詞であるが、これは、その働きが、前に述べられた論陣の理由が上げられないことには論陣としては確固とした根拠が無いが故に希薄な面があることを免れないということの判断によって、「・・・というのは」とか、「その訳は・・・だから」とか、「・・・だから・・・だ」といった部分を添えることとなる訳である。これは、その論陣の展開の弱さ、希薄さ等を補強する働きがあるという程度のものであるから、論旨の展開からすると、まさしく削除の対象として見て良いであろう。すると、because や for や The reason is that ・・・等は、文章の中では実に簡単に視覚的に判別出来るものである。

次に、対照を表わすための接続詞であるが、これは、先にセミコロンのところ、その対照の働きについて論じたが、あの用法と今は全く同じであるので、多くを語る必要は無いと考えられる。ただ、セミコロンは記号であったのに対して、今は while という接続詞である。これにもいろいろな働きと意味とがあるため、セミコロンの時と同様に脈絡上、瞬時にしてその対照関係を見抜くだけの習練が積まれなければならない。しかしながら、そうは言うものの慣れてしまえば、これまた殆ど直観的に掌握することが出来るようになるものである。

次は、例を述べるための言葉についてであるが、これは、for example とか for instance とかといった言葉であるが、前に出た論旨のある部分について、分かり易くするための用例の紹介であり、そのことによって読者なり聞き手の方が理解に困難を覚えないようにする効果があり、その意味で価値もあるわけであるが、しかし、それだけのことであって、もしも読者や聞き手の方が例など見せられなくとも先刻承知するところであったり、理解できるところであったりすると、このような例はもはやその価値を失う運命にあるわけであるから、論旨の掌握の点からすると、これまた削除の対象として見做すことの出来るものである。だから、このような for example とか for instance とかといった言葉に遭遇する時には、スキップなり無視するなりして、次の文面に視点を移行することが出来るわけである。

最後は、懐旧談的な文面を紹介するための書き起こしの言葉であるが、この言葉に出くわす時は、作者なり話し手の方が、ある種の感懐に襲われていて、その気持ちへの同調を求めるか、理解を求めるかする激しい意欲の顕れであって、そのこと自体は状況そのものを盛り上げる大きな働きがあるので、時として論旨とは無関係に、ある種のドラマチックな効果をも作り出すことに繋がることもある。しかし、あくまで論旨とは無関係であるから、これまた削除の対象としてスキップするなり、無視するなりすることが出来る。しばしばあることではあるが、こうした懐旧談はドラマチックであればあるほど、そのことの方がむしろ末永く記憶される効果があり、時が経過するにつれ、このことが話題に登るという不可思議さがある。いってみれば、懐旧談とは人の経験に過ぎないものであるが、その経験が異常であればあるほど、また奇異であればあるほど、情感的な理解と記憶を十分に擲るといふ効果があるのであろう。だから、時として、論旨は忘れ去られても、この懐旧談の方が何時までも人の口に登るのである。

以上をもって一応、その削除することのできる対象の記号や言葉を、視覚的に発見する具体的な方法の説明を終えたいと思う。これは、先に述べた通り、あくまで目的を果たすための一つの技術に過ぎないことは、今更述べるまでもないことである。このように論旨を掌握せんがために、技術的に文章をずたずたに切断してしまうやり方については、とかくの批判もしくは不要論が出そうであるが、つまり、文章とはその文章を書き記した人の人柄であり、人格であるが故に、その文章はその人の持つ文体なるものが滲み出ているのであるから、これをずたずたに切断するなんていうことは、到底耐えられるものではないと言うであろう。それはまさにその通りであって、そのことには原則的に賛成するものであるけれど、こと論旨、つまり文面の概要を論じてみなければならぬ場合に差し迫った時には、そんな技術など使わなくとも叶

う人は別として、そうでない人は、それが出来ない以上、あるいは出来そうにもない不安に襲われている以上、この技術の必要性は出てこようというものである。何度でも言うことであるが、文章を受け入れて、その文章が理解出来、その文章の概要がつかめて、その上、その文章の内容が鑑賞できれば、こんな素晴らしい自然なやり方はないのであって、これはまさに至上の方法であろうということになんら異議を差し挟むものではないということについては、今一度繰り返して述べて置きたいと思うのである。

さて難解な文面のある文章についての概要を掌握するに当って、その文章が、以上のような書きだしと展開とで、全て統一的に書かれたり述べられたりしていることが普通だと受け止めて良いのであろうか。このことについて、いますこし論じてみたいと思う。

確かに論文調の文面はおおむねそうであろうが、必ずしもそうでない場合については、どう対処すれば良いのであろうか。そんな場合、キーセンテンスが必ずしも各パラグラフの冒頭に置かれているとは限らない。すなわち、文章の出だしが、なんととはなしに本論とは何ら関係が無いかのような言葉の羅列であったりすると、早くキーセンテンスが見つからないかと躍起になるのであるが、そんな場合は、大抵、そのパラグラフの最後の部分のところで、その話題の中心的な文面に関係しそうな部分が紹介されるのである。それがまたキーセンテンスだと思いとまた失敗することがあるので、その部分をしっかりと受け止めながら、次の第二のパラグラフを見る時、そこにキーセンテンスと関係のある文面が収斂するように次第に纏まりのある方向へと展開されて行くことに気付くのである。そんな場合は、思い切って各パラグラフの最後の文章に眼を走らせてみるのが、手っ取り早く筋を、従って論旨を掌握するのに良い。このような文章の文体というものは、作者の方が予め草稿とその構想を綿密に建てているわけではない場合の方が多いと考えられるのであるが、それだからといって、その作者の不勉強ということには繋げられない。そういうことは、まさにその人の持つ特性というものであって、言ってみれば、その人の人柄、いや、その人自身であるという外ない。だから、そんな場合には、作者は考えながら、文章を作成する楽しみにどっぷり漬かっているのであるから、これを受け止める側の読者または聞き手の方もそれに対処して、最後は何と言っているのかとか、あるいは最後は何と言おうとしているのかということに、まさしく注目と関心を傾注するように努めなければならない。このような場合にしても、最初に述べたように、いわゆる説明の部分を発見して、それらを削除しながら整理して行くほどに、なんととはなしに収斂されていく部分が顕著に浮き彫りにされてくるものであるから、結局はそう大した苦労もなく解決出来ると言わざるを得ない。

さて、最後になったが、各キーセンテンス相互の関係と論旨の進展について論じなければならない。各パラグラフのキーセンテンスの発見が出来ただけでは、論旨が掌握出来るわけではなく、それらキーセンテンス相互の関係を認識し、論旨の進展について跡を辿るようにして内容を把握して行かなければ、全体としての論旨の流れが理解出来ないままに終わってしまう。では具体的にはどうすればよいか。

基本的には第一パラグラフのキーセンテンスが何といっても中心的なキーであるから、次に続く第二、第三、第四…の各パラグラフのキーセンテンスがそれぞれこの第一のキーセンテンスとどのような関係に置かれて論ぜられているかを明細に把握しなければならない。そうすることによって、論旨の展開が明確に整理され、いわゆるその筋がわかるということになるのである。このようなキーセンテンス相互間の関係を曖昧なままにして論旨を論ずる場合がしばしばあるが、そうした場合であれば、論旨を纏めるに当たって、矛盾の発生を招くこととなり、的確な掌握には到底到らないということになる。

以上をもって「4. 英文概要の掌握はいかにあるべきか」を終わりたいと思う。次に以上の理論について、実際の英文を使って具体的に検討してみたいと思う。勿論、様々なスタイルと様々な展開を持つ文章に当たってみないことには、口幅ったい上記の理論がその信憑性を問われるようなことに成り兼ねないからである。

5. その実際と問題点について

(1) 次の英文を読んで、段落ごとにその要旨を日本語で50字程度で述べなさい。

Many Americans and Europeans today see Japan as the first genuinely Westernized nation in Asia. We see what appears to be the capacity of the Japanese to copy the ways and thought of the West. We are intrigued by the ability of the Japanese to reform a once-feudal political social order into an apparently democratic society. We respect Japanese efforts to build an economy that rivals those of the West in organization and productivity. Looking at these and hundreds of other changes in Japan over the last century, many Westerners believe the Japanese themselves have changed and are now like us, remaining Japanese and Asian only by the accident of geography. This image, however, is an illusion that is reflected from the surface of Japan. Beneath, the essence of Japanese life flows from ideas, ethics, customs, and institutions that are anchored deep in Japanese culture and history. The core of Japanese tradition guides the daily lives of the Japanese and directs the internal and external courses of their nation. That core has been little touched by incursions from the West.

Western influence has changed the face of Japan and the accoutrements of Japanese life, but it has not penetrated the minds and hearts of the Japanese people. Many centuries ago, Japanese culture was influenced by ideas from China and, to a lesser extent, from Korea. The Chinese imprint is still visible today, particularly in the Japanese writing system. But many Chinese ways were tried, found unsuitable, and rejected. The Japanese, moreover, thoroughly modified those Chinese concepts that were retained as they assimilated and "Japanized" them. Similarly, the Japanese have taken from the West a few things whole (technology), adapted and made Japanese others (political forms, economic organization, and the press), and rejected outright still others (Western religions). (金沢大学・昭和54年)

この英文は二つのパラグラフから成り立っていることは明瞭である。このことは、視覚的に形の上で決定的に判然とする。すなわち、一つ目のパラグラフが終わると、次のパラグラフの最初の行の出だしは、決まって二文字乃至四文字あけてから、書き出されているからである。従って、キーセンテンスは、パラグラフが二つある以上、当然二つあることになる。

最初のパラグラフのキーセンテンスは、その最初の出だしの文である 'Many Americans and Europeans today see Japan as the first genuinely Westernized nation in Asia.' の部分がそれであり、次の第二のパラグラフのキーセンテンスは、その最初の出だしの文である 'Western influence has changed the face of Japan and the accoutrements of Japanese

life, but it has not penetrated the minds and hearts of the Japanese people.’ の部分がそれである。これら二つのキーセンテンスだけを読んだだけで、論旨は明確に掌握出来るわけである。すなわち、「アジアで初めて西歐化した国は日本である、と欧米人は認めている。しかし、それは皮相的な面にしか過ぎないのであって、日本人の精神や心までは変わっていない。」ということに尽きる。これだけで使用した語数は、70語を越えている。ところがこの要旨を50語で述べるように要求されているのであるから、これを70語以上の語数から更に50語以内に縮小しなければ要求に応えたことにならない。そのことは、更に語数を削ればどうにでもなる問題ではあるが、ややもすると、それではぜんぜん注目されていない他の部分、すなわち、各パラグラフのキーセンテンス以下の残りの文章の内容についてはどうなるのであろうかと、危惧する心が払拭出来ないでいる場合がある。そのことに対してはどう対処したら良いかという問題が発生してくるかも知れない。しかし、そのことについては、先に触れた通りに、それら残余の部分は皆おおむね、説明部分であるから、論旨を曲げたり、論旨に重大な影響を与えたりするものでないということは、先刻ははっきりしているところである。しかし、ここではそのことについて、これから更に具体的に当たってみなければ、一部の危惧を払拭することにはならないと考えられる。

先ず、第一パラグラフであるが、キーセンテンス以外の残余の部分のそれぞれの文章がそのキーセンテンスに対してどのような働らきをしているかを検討してみる。第二の文章、‘We see what appears to be the capacity of the Japanese to copy the ways and thought of the West.’ は、日本人の模倣能力、つまり、吸収能力について触れているのだが、そのことは、しかしキーセンテンスとの関係を考慮すると、それは単に日本の西歐化の根本的な原動力とでも言って差し支えない理由の一つをあげたに過ぎないとみなければならない。また、第三の文章、‘We are intrigued by the ability of the Japanese to refrom a once-feudal political and social order into an apparently democratic society.’ は、日本人の変革するための適応能力について述べているのであって、つまるところ、この文章は、第二の文章と同様にキーセンテンスの理由を言っているのである。第四の文章、‘We respect Japanese efforts to build an economy that rivals those of the West in organization and productivity.’ は、日本人の経済能力、それも西歐のそれに比肩し得る能力に敬意を表わしているのであるが、それは、キーセンテンスとの関係を考えると、それだからこそ日本の西歐化が言えるということの証左であると言っているのであって、これまた理由の一つに数えられるであろう。次の第五の文章、‘Looking at these and hundreds of other changes in Japan over the last century, many Westerners believe the Japanese themselves have changed and are now like us, remaining Japanese and Asian only by the accident of geography.’ は、こうも大変化を遂げた日本はまさに西洋と何ら変わるところがないとまで言い切っており、たまたま地理的な違いだけしか残っていないとまで言っている。このこともまた、日本の西洋化の認知とみなすことができる。ところで、次の第六の文章、‘This image, however, is an illusion that is reflected from the surface of Japan.’ は、日本の変身にたいする見方が表面的過ぎていて、必ずしも真実を伝えるものでないと言っており、ここにいたって、以上に述べた日本の西洋化は、本当のところはどうかについて、もっと深く考えてみようとする視点を打ち出してきたわけである。つまり、第一のパラグラフで、日本の西洋化については、これを認知することには吝かではないが、それと同時にその深窓部分についても触れてみようというのがその範囲となっていると見るべきであろう。そのことはまた、つぎのパラグラフのキーセンテンスの前触れとも導入ともなって行くような手口をとっていると考えられる。

次の第七の文章、‘Beneath the essence of Japanese life flows ideas, ethics, customs, and institution that are anchored deep in Japanese culture and history.’ は、第六の文章の視点を具体的に述べた説明であり、日本人の意識の深窓部分は変わっていないことに触れている。次の第八の文章、‘The core of Japanese tradition guides the daily lives of the Japanese and directs the internal and external courses of their nation.’ は、第七の文章を更に具体的に述べた説明であって、今度は日本の持つ昔からの伝統は厳然と存在し影響をいかに発揮していることに触れている。次の第九の文章、‘That core has been little touched by incursions from the West.’ は、日本の伝統的な部分は西洋化といえどもその影響は及ばないという限界を述べたものであり、結局は、日本の西洋化とその限界を決定的に述べたわけである。しかし、そうは言うものの、このパラグラフは、やはり、アジアにおける日本の西洋化が最初であることには間違いがないのであるから、キーセンテンスとしてはこれまた間違いがあろうはずがない。すると、最後の部分の日本的伝統はこれとどのように関係づけたいかが。それは、第二のパラグラフのキーセンテンスのところでも明白に、かつその伝統の部分も包括しながら触れているので、それに任せることで、すなわち、第二のパラグラフを誘導する部分として見做すことによって、このことは流していても良いのではないかと考えるのである。

次に、第二のパラグラフは、そのキーセンテンスに続いては、第二の文章、‘Many centuries ago, Japanese culture was influenced by ideas from China and, to a lesser extent, from Korea.’ は、日本の変革は表面的であって、深窓部分までは決して変革するものではないということについて、歴史的に同じ現象が無かったのかどうかをその過去を振り返って、見ようとするものである。中国や朝鮮からの影響は確かにあったことに触れている。第三の文章、‘The Chinese imprint is still visible today, particularly in the Japanese writing system.’ は、その例として、日本語の書き方をあげているわけだが、第四の文章、‘But many Chinese ways were tried, found unsuitable, and rejected.’ は、しかしながら、中国式の他の様々な様式についてみると、これは受け付けなかったということに触れている。第五の文章、‘The Japanese, moreover, thoroughly modified those Chinese concepts that were retained as they assimilated and “Japanized” them.’ は、日本人の同化吸収能力によって中国の様々な考え方がすっかり変えられているということ、すなわち、完全な模倣ではなかったということに触れている。このように歴史的にみても日本は日本独自の生き方をしていたということ述べようとする説明である。最後の第六の文章、‘Similarly, the Japanese have taken from the West a few things whole (technology), adapted and made Japanese others (political forms, economic organization, and the press), and rejected outright still others (Western religions).’ は、歴史的にみてもそうであったことが、今日の日本もまたその現象は同じような軌跡を辿っているということに触れているとあって良いであろう。すなわち、対象そのものは今日流に変わってはいるものの、そのやり方はまさに昔と変わりが無いわけである。つまり中国からの影響を同化吸収する能力はそのまま西洋からの影響を同化吸収する能力に変わっただけのことで、日本本来の伝統的な独自性は失われていないということである。

理由も説明の内であり、視点の変更も説明の内であり、まして例はもっと説明を表わしているのであるから、結局はキーセンテンスの次には説明しか無いということになってくるという外ない。運筆の妙はその作者の人柄に影響を受けるところが大きいだが、そのような展開にまで論旨の論述が論及しなければ論旨にならないとしたら、もともとの問題要求の条件そのものが、

つまり少ない語数で表現するといった要求そのものが無理ということになるはずである。だから、展開までも論旨の論及の中にも含める問題であれば、当然のことながら、それだけの語数を示すことによって要求するはずであると考えたい。蛇足ながら、この展開の仕方、展開の論陣の張り方、あるいは、展開の妙、展開の格調の高さ、展開に披瀝される学識の深さ、豊富さ、展開の視点の豊かさといったものが論旨とは別にその論文の全体的な品格と価値深さをそれらの無い場合よりも、あるいは、それらの貧弱さよりも、ずっと高めてくれる支えとなってくれるものであることについては今更論を待たない。つまり、読者の関心をずっと刺激するものであることは言うまでもない。しかし、論旨とこうした豊富な量の説明とはあくまでも識別できる読破する能力が、読者の方に要求されることは、決して忘れてはならない。読書しながら絶えずその文章がすでに発見された、あるいは、これから発見されるであろうと思われるキーセンテンスとどのような関わりがあるのかということについて反芻する能力、しかも、それも即座に直観的に判別する能力になるまでに修養して行かなければならない。そうは言うものの、これも技術的にはすでに述べた通りに、キーセンテンスはかなりはっきりと判別が、しかもかなり視覚的にはっきりと判別ができるものであるから、そんなに難解なものであるとは言えないであろうと思われるので、そんなに心配は要らないと考えられる。

以上でやっと一つの例文の解説がすんだが、これから次に更に別の論調の論文を例にあげることによって、その論旨の捕らえ方について更に考えて、先に述べた論旨の掌握の仕方を論証して行きたい。

(2) 次の文の要旨を80字から100字の日本語で書け。ただし句読点も回数に数える。

The notion that every problem can be studied as such with an open and empty mind, without knowing what has already been learned about it, must condemn men to a chronic childishness. For no man, and no generation of men, is capable of inventing for itself the arts and sciences of a high civilization. No one, and no one generation, is capable of rediscovering all the truths men need, of developing sufficient knowledge by applying a mere intelligence, no matter how acute, to mere observation, no matter how accurate. The men of any generation, as a French philosopher once put it, are like dwarfs seated on the shoulders of giants. If we are to "see more things than the ancients and things more distant" it is "due neither to the sharpness of our sight nor the greatness of our stature" but "simply because they have lent us their own." For individuals do not have the time, the opportunity or the energy to make all the experiments and to discern all the significance that have gone into the making of the whole heritage of civilization. In developing knowledge men must collaborate with their ancestors. Otherwise they must begin, not where their ancestors arrived but where their ancestors began. If they exclude the tradition of the past from the curriculums of the schools they make it necessary for each generation to repeat the errors rather than to benefit by the successes of preceding generations. (東京大学・昭和53年)

その中にパラグラフが一つしかないこのエッセイは、要旨を述べる段になると、どうすれば良いかが次の問題である。しかも要求する問題提出者はそれを80字乃至100字以内の日本語で

表わすように言っている以上、単なるキーセンテンスのみに触れた纏め方ではその要求に応えたことにはならない。要旨とは大体の内容について述べることであるが、先の(1)の場合の50字程度に纏めた場合とは、やり方を多少変える必要がある。キーセンテンスは言わずと知れた最初の文章の 'The notion that every problem can be studied as such with an open and empty mind, without knowing what has already been learned about it, must condemn men to a chronic childishness.' であるが、これは「先人の究めた知識を借りなくとも、受け入れ易い広い心さえあれば、どんな問題だって究められるという考え方に拘泥していると、人間は誰もいつまでたっても幼稚である。」という論旨である。このキーセンテンスだけの論旨の日本語の語数は、79字である。確かにこの論旨でもって、このパラグラフの言いたいところは言い尽くされてはいるが、80字から100字内の字数で書くように要求されている問題に応えたことにはならない。ではあと20字内でどのような内容に触れて追加すれば良いのか次に考えるべき問題となってくる。キーセンテンスに続く第二の文章、 'For no man, and no generation of men, is capable of inventing for itself the arts and sciences of a high civilization.' は、そのキーセンテンスの理由を述べたものであり、理由とは、先に触れた通り、説明の一部に過ぎないのであるから、このことをその追加すべき20字の中に入れる対象にするべきではない。次の第三の文章、 'No one, and no one generation, is capable of re-discovering all the truths men need, of developing sufficient knowledge by applying a mere intelligence, no matter how acute, to mere observation, no matter how accurate.' は、これまた、前の第二の文章の理由を更に具体的に敷衍し、説明する部分に過ぎないことは言うまでもないところである。次の第四の文章、 'The men of any generation, as a French philosopher once put it, are like dwarfs seated on the shoulders of giants.' もまた敷衍であるから、これまた削除である。次の第五の文章、 'If we are to "see more things than the ancients and things more distant" it is "due neither to the sharpness of our sight nor the greatness of our stature" but "simply because they have lent us their own."' は、「たとえ先人以上のことができたとしても、それは先人から借りた部分が非常に大きい」と言っているのであって、これは、やはり敷衍の一つに過ぎないと判断すべきであろう。次の第六の文章、 'For individuals do not have the time, the opportunity or the energy to make all the experiments and to discern all the significance that have gone into the making of the whole heritage of civilization.' は、この第五の文章の敷衍の理由について述べたものであり、これまた削除の対象となってくる。次の第七の文章、 'In developing knowledge men must collaborate with their ancestors.' は、これまでの説明や敷衍や理由とは違って、初めて話題の視点が転換されていることに注目しなければならない。しかしながら、そうは言うもののこの視点がキーセンテンスとどのような関わりを持っているのかについて考えてみると、キーセンテンスの場合は「先人の知識を無視すると発達は無く、いつまでも幼稚さは付きまとう。」ということであったのに対して、これは「知識を展ばそうとすれば、先人は無視出来ない。」ということであって、その両者は互いに裏腹のことに触れているだけで、言っている内容は同じである。しかし、同じことを別の角度から今一度触れるということは、力説することに、つまり強調に通ずることであるから、その意味においてこの文章は無視することができない。次の第八の文章、 'Otherwise they must begin, not where their ancestors arrived but where their ancestors began.' は、前の第七の文章の敷衍に過ぎないことは言うに及ばないから、これは削除する。次の第九の文章、 'If they exclude the tradition of the past from the curriculums of the schools they make it

necessary for each generation to repeat the errors rather than to benefit by the successes of preceding generations.’ は、これまた、場所こそ学校に移行した違いがあるにせよ、言っている内容は変わりがないから、敷衍の一つと数えることが出来るであろう。従って、これもまた削除することが出来る。すると、結局は、キーセンテンスの次にながながと文章があったのであるが、第七の文章を除いては全て削除することとなり、その第七の文章を、これも強調の役割しかないのであって、論旨を変えるほどのものではないのであるから、その程度に扱うという姿勢で対処する考えで臨んで、キーセンテンスに追加するように書き変えてみると恐らくは 100 字以内の文に纏まるであろう。すなわち、「先人の究めた知識を借りなくとも、受け入れ易い広い心さえあれば、どんな問題だって究められるという考え方に拘泥していると、人間は誰もいつまでたっても幼稚であるから、先人を無視することなく知識を展ばそう。」となり、これで丁度 100 字である。

次に、検証問題の第三例として、エッセイというより、もう少し現象面の多い物語風な文面の場合を取り上げてみたいと思う。

(3) 次の文章を読み、以下の設問に答えよ。(これは、いろいろな設問があって、その中に内容と一致するものや一致しないものを発見するもの等があり、要旨のみを問う問題ではない。)

Last year I was invited to the University of California in Los Angeles to deliver a lecture. I had not been in the city twenty-four hours before I felt perfectly at home. Now, at first sight, this is ridiculous. No other city in the world could have been less like any of the cities I have called home. It is vast in area, and within the area the citizens live at remarkably low densities. And they live almost entirely in single-storey houses surrounded by a style of garden which is a cross between the Anglo-Saxon tradition and the tropical. What is confusing is the distances that the citizens are (C) to travel within their diffuse metropolis. To pick up some friends, bring them to your house for dinner, take them back afterwards and get home again, might involve you in 100 to 150 miles of motoring in one evening. Fortunately it is not so difficult as you might expect, because most of the distance will be done at sixty miles an hour on the freeway.

Like all truly great cities, Los Angeles is unique unto itself; but unique in a special way that makes it strangely familiar to an English academic of my generation and experience. You may wonder why so many Englishmen of my own age feel at home in Los Angeles. I could not quite put my finger on it myself, but one of my friends from England did. "Los Angeles is just like London," he said. As the visiting eye sees them, no two cities could look less alike, but as the resident uses and inhabits the place, it is profoundly true because, to finish what he said, "it's a collection of separate villages." (東京大学・昭和53年)

この問題は、その抱き合わせの問題として同じような傾向がよくあることなので、やや一般的な問題として扱ってもいいのではないかと考えているのだが、前の(2)の問題において、東京大学の方が出題者として、受験生の抽象的な概念の掌握の能力を試したのに対して、現象面の多い部分から成り立つ、やや物語的な文面の理解力を別の角度から試そうとするものであると受け止めることが出来る。つ

まり、受験生の立場からすると、前の方で難解な抽象的な文面の掌握能力を梃摺って解答しようと努力したのに対して、ここにおいて、現象的な、そして現象的であるが故に掌握し易い印象を与えずにはおかない近しさを感じさせる文面に接して、得点を上げることが出来るという感懐を持つのである。恐らくその辺りを狙って出題したとすれば、情感に重きを置くような文学的な受験生は大いに得点を上げることが出来ると思われる。果たして大学当局はそのこの処をどう考えているのであろうか。確かに、この世においては、抽象と具象とは人々の心に絶えず存在するものであり、どちらか一方が、他方より一層根強くあるいは強烈に人々の心の中に存在することもあるし、またどちらか一方だけを追求し過ぎて、他方を全く無視するか排除するかすることもあるだろうが、しかし、そのように偏り過ぎたやり方だけでは世の中は動かないことは分かり切っている。それだからこそ、この情感的な文面の理解もまた抽象的な文面の理解と同様に必要なのである。

さて、この文は、最初の出だしのところで、いわゆるキーセンテンスが置かれていない。最初の文、‘Last year I was invited to the University of California in Los Angeles to deliver a lecture. (去年、ロスアンジェルスのカリフォルニア大学に招かれて講演をした。)’は、過去にあった事実を単に紹介したものに過ぎないのであるが、それがまたどのような展開になって行くのか、分からないままに次の文へと読まざるをえない配置である。次の第二の文、‘I had not been in the city twenty-four hours before I felt perfectly at home.

(ロス市ではまる一日と経たない内にすっかりくつろいだ気分になった。)’は、招待されて間もないのに直ぐにその場所に馴染んだことに触れている。次の第三の文、‘Now, at first sight, this is ridiculous. (ところで、一見すると、このことは滑稽である。)’は、その住み心地の良さは常識的に考えると可笑しいということである。読者としてはこの段階ではまだ何について書かれようとしているのか皆目判断出来ない状態である。更に次の第四の文、‘No other city in the world could have been less like any of the cities I have called home.

(このロス市ほどに、気楽だと言ってきた都市のいずれにも似ていない都市は、世界中どこを探してもなかった。)’は、第三の文の意味する唐突な可笑しみ滑稽さというものの説明に入ったことをここで読者は知ることになり、かつ、どうやらこの世界にも例のないほどのアメリカのそれ独自の特色に触れようとしていることに気付くのである。次の文が予測できそうである。ここに読者の関心が急速に高められることに気付きもする。さて、次の第五の文、‘It is vast in area, and within the area the citizens live at remarkably low densities.

(面積は広大で、その中に市民が住んでいてもその人口密度はすごく低い。)’は、次の第六の文、‘And they live almost entirely in single-storey houses surrounded by a style of garden which is a cross between the Anglo-Saxon tradition and the tropical.

(人々はおおむね一階建ての家に住んでいて、その家も英国系の伝統と熱帯地方の伝統が混じり合った趣向の庭に取り巻かれている。)’と共にまさに説明の文に入っているが、まだその説明部分は物足りなさがあって、不十分である。まだ説明を追加してもらわないと、何を言おうとしているのかについて、心証を満足させるには至っていない。そこで次の第七の文、‘What is confusing is the distances that the citizens are prepared to travel within their diffuse metropolis. (面食らうのは、ロス市民がその広大な大都市を覚悟して行き来する距離のことだ。)’であるが、これは先に人口密度の低い都市の中で、庭に取り囲まれた一階建ての家に住んでいるアメリカ人の環境について触れていたが、その家と家との間の距離について触れたものである。その次の第八の文、‘To pick up some friends, bring them to your house for dinner, take them back afterwards and get home again, might involve

you in 100 to 150 miles of motoring in one evening. (友達を乗せて夕食会に家まで運んで、それから後でまたその友達を家まで送り返すには、一晩に100乃至150マイル運転する必要がある。) は、家と家との間の距離が長いのに、それでも人々の間は決して疎遠なわけではなく、交際が行われており、自動車の高速性によってその問題は解決されていることを述べている。次の第九の文、'Fortunately it is not so difficult as you might expect, because most of the distance will be done at sixty miles an hour on the freeway. (幸いなことに、そういう暮らし方は存外しにくいものではなく、それも高速道路を時速100キロでとばすからである。) は、そのことを具体的に説明したものである。以上が第一パラグラフの全てであるが、こうしてみると、一体この第一のパラグラフにおいては、作者は何を言おうとしたのであろうか。今一度振り返ってみると、ロス市は世界に類例のない程、人口密度の低い都市で、人々は庭に取り囲まれた一階建ての家に住み、高速道路の利用により家と家との間の距離という隘路を解決して、快適な生活を送っていて、決して互いの間の疎遠さを放置するのではなく、その逆に親密さを求め、かつ維持し深めているといった内容であった。このことは、アメリカの超近代的な新しいタイプの生活の紹介であり、説明であって、そのような生活に外国人の作者といえども程無く住み慣れたことを言っているのである。このような文は、どこにキーセンテンスがあるわけではなく、ひたすら全体の文面の中からその流れとでもいべきものを拾いながら結び付けて行くほかない曖昧さが漂うのである。それだけ、ある意味で苛々させるものがあるが、翻って情緒面を刺激しないでは置かない面白さもあるわけである。しかしながら、同じようにして第二のパラグラフについてみると、今度は、第一のパラグラフと違って、明らかにキーセンテンスが最初の文章に明示されていることに気付くのである。後に続く文章はその説明と理由である。すなわち、第一の文章、'Like all truly great cities, Los Angeles is unique unto itself; but unique in a special way that makes it strangely familiar to an English academic of my generation and experience. (本当に大きな都会ならどれもこれもそうであるように、ロサンゼルス市もまた類例の無い都会である。しかし、特別な点でロス市は類例が無いのである。それによってロス市は、私と同じ世代に生まれ私と同じ経験を持つイギリス人の学究にとっては、妙なくらい馴染み深いものになっている。)' は、第一パラグラフのテーマの、すなわち、アメリカの超近代的な新しいタイプの生活に外国人の作者ですら住み慣れたことの、主要な理由は、上記の単なる高速道路と高速自動車といった物理的なものの出現によるのではなく、ロス市が類例の無い都会であるということによると訴えているのである。次の第二の文章、'You may wonder why so many Englishmen of my own age feel at home in Los Angeles. (私と同年齢の多くのイギリス人がどうしてロサンゼルス市で寛いだ気分になれるのか、不思議に思われるむきもあるだろう。)' は、そのことの理由を述べるための導入部分になっていることがわかる。次の第三の文章、'I could not quite put my finger on it myself, but one of my friends from England did. (私自身はそのことを全く説明がつかなかったが、イギリスから来た私の一友人はそれをやってのけたのである。)' は、理由を述べる具体的な人物の紹介に入ったことを示している。次の第四の文章、'“Los Angeles is just like London,” he said. (「ロサンゼルス市はロンドン市と全く同じだ。」と彼は言った。)' は、まさにその理由の根本を言ったわけである。次に続く最後の第五の文章、'As the visiting eye sees them, no two cities could look less alike, but as the resident uses and inhabits the place, it is profoundly true because, to finish what he said, “it's a collection of separate villages.” (来訪する人が見る限りでは、ロス市ほど似ていない都市は他に無いと映るだろうが、居住者がそこを利用し、そこに

住み着くにつれて、ロス市がロンドン市とうりふたつだということが全く本当になってくる。そのわけは、友人の喋った言葉で結ぶと、「ロス市はそれぞれ独自の散居村を一つに集めたものだ。」からである。』は、その理由の根本をまさに説明したものである。

以上で二つのパラグラフの言いたいことがはっきりとわかったわけであるが、エッセイとか論文と違って、まことに締まりの無い具象性に富んだ表現であった。ところで、この文章を通じて見逃してはならないものがある。第二のパラグラフの中に 'my generation and experience' や 'my own age' のように、「私」ということがかなり重要な意味を持たせているのである。「私」の世代の人々にとっては、まさにアメリカなるものがどのようなものなのかということ、かなりの問題となって意識しないではおれないある意味での関心の的になっていたと思われるし、実際にそこへ足を踏み入れて見ると、存外、英本国と変わりが無いことに気付いたために、ある意味で歓喜を覚えなければおれない共通意識を覚えたのであろうからこそ、この一文を書いたのであろうと思われるのである。そのところの感懐こそが深窓部分に横たわる真に言いたい点では無かったのかと思われるべきでない。それがもし真実であるとすれば、このような物語調の文章の持つ全く冴えない表現の仕方、ある種の冷めたいものを覚えなければおれない。

(4) 次の英文を読んで、下の設問A, Bに答えなさい。

If peace is ever to be secure, there will have to be great changes in education. At present, children are taught to love their country to the exclusion of other countries, and among their countrymen in history those whom they are specially taught to admire are usually those who have shown most skill in killing foreigners. An English child is taught to admire Nelson and Wellington; a French child, to admire Napoleon; and a German child, Barbarossa. These are not among those of the child's countrymen who have done most for the world. They are those who have served their country in ways that must be forever closed if man is to survive. The conception of Man as one family will have to be taught as carefully as the opposite is now taught. This will not be an easy transition. It will be said that boys under such a regimen will be soft and effeminate. It will be said that they will lose the manly virtues and will be destitute of courage. All this will be said by Christians in spite of Christ's teaching. But, deadful as it may appear, boys brought up in the old way will grow into quarrelsome men who will find a world without war unbearably tame. Only a new kind of education, inculcating a new set of moral values, will make it possible to keep a peaceful world in existence.

There will, after all, be plenty of opportunity for adventure, even dangerous adventure. Boys can go to the Antarctic for their holidays, and young men can go to the moon. There are many ways of showing courage without having to kill other people, and it is such ways that should be encouraged.

In the teaching of history, there should be no undue emphasis upon one's own country. The history of wars should be a small part of what is taught. Much the more important part should be concerned with progress in the arts of civilisation. War could be treated as murder is treated. It should be regarded with equal horror

and with equal aversion. All this, I fear, may not be pleasing to most present-day educationists. But, unless education is changed in some such way, it is to be feared that man's natural ferocity will, sooner or later, break out.

But it is not only children who need education. It is needed, also by adults, both ordinary men and women and those who are important in government. Every technical advance in armaments has involved an increase in the size of States. Gunpowder made modern states possible at the time of the Renaissance by making castles obsolete. What castles were at that time, national States are now, since weapons of mass destruction have made even the greatest States liable to complete destruction. A new kind of outlook is, therefore, necessary. Communities, hitherto, have survived, when they have survived, by a combination of internal co-operation and external competition. The H-bomb has made the latter out of date. World-wide co-operation is now a condition of survival. But world-wide co-operation, if it is to succeed, requires co-operative feelings in individuals. It is difficult to imagine a World Government succeeding if the various countries of which it is composed continue to hate and suspect each other. To bring about more friendly feelings across the boundaries of nations to begin with, a matter of adult education. It is necessary to teach both individuals and Governments that as one family mankind may prosper as never before, but as many competing families there is no prospect before mankind except death. To teach this lesson will be a large part of the educative work of our scheme. (慶応義塾大学〔経〕・昭和49年)

英文概要論の具体的な論証の例として、その第四番目にこの問題を引用したそもその理由は、この例文に四つのパラグラフがあることが、二つ以上のパラグラフから成る文章を扱うことを次の考察すべき対象として考えているその条件を充たしてくれるからである。そのことに加え、この例文は、各パラグラフの最初の文そのものが確かにキーセンテンスとしての働きを備えてはいるものの、それに続くいわゆる説明部分は今まで見てきた構成部分よりもかなり質的な相違を見せているために、別の角度から検討を加えるべき要素があることに留意する必要がある。それがどの程度のものであるのか、これからの考察を待つほかないのであるが。

さて第一のパラグラフであるが、そのキーセンテンスは、その第一の文、'If peace is ever to be secure, there will have to be great changes in education. (そもそも平和を揺るぎないものにするためには、教育を大きく変化させるところがなければならないだろう。)'である。ところが、これに続く説明の部分がかなり長く用意されていることに目を見張る。しかし読者としては、教育の大変化によって目的を果たすことが如何に困難なことであるかは、歴史的に見て分かっているところであるから、この時点で作者の意図に懸念を抱かざるをえない。それに続く説明に、減殺された関心をかろうじて寄せながら、どのように論陣を張ろうとしているのか、多少の不安を持つのである。さて、本論に戻って、教育上の大きな変化が期待されるとすれば、現在のあるいは過去の教育はどうであるのか、そしてそれが果たしてどの点で平和な世界を待望するのに隘路となっているのであろうか。その説明はどうなのか。その第二の文、'At present, children are taught to love their country to the exclusion of other countries, and among their countrymen in history those whom they are specially taught to admire are usually those who have shown most skill in killing foreigners.'

(現在、子供達は他国を排除して祖国を愛するように教えこまれており、歴史上の同胞の中で特に崇拝するように教えられているひとは、いつも、異国の人々を殺害する時に最も大きな腕前を見せてくれた人である。) は、その現在の教育の状況であり、言ってみれば、それは説明の一部にすぎない。次の第三の文、‘An English child is taught to admire Nelson and Wellington; a French child, to admire Napoleon; and a German child, Barbarossa. (イギリスの子供はネルソンとウエリントンを崇拝するように教えられており、フランスの子供はナポレオンを、ドイツの子供はバーバロッサを、崇拝するように教えこまれている。)’ は、更に具体的な例証に過ぎないことがわかる。次の第四の文、‘These are not among those of the child’s countrymen who have done most for the world. (これらの人々は、子供の同国人の中で、世の中のために最も尽くしてきた人として上げられていない。)’ は、本当に崇拝されてしかるべき人が別にいて、その人達が崇拝の対象として教育の場で教えられていないことに触れていると考えることが出来る。次の第五の文、‘They are those who have served their country in ways that must be forever closed if man is to survive. (そうした人々は、人間が生き存らえるとしたら、二度とあってはならないやり方で、祖国のために尽くしてきた人々である。)’ は、更に祖国のために尽くしたやり方に触れた具体的な説明の一部である。次の第六の文、‘The conception of Man as one family will have to be taught as carefully as the opposite is now taught. (人間は一つの家族だとする考え方が、これから相手方の家族と同様に注意を払って教えられて行かなければならない。)’ は、教育の本当の人間観について触れたものである。次の第七、第八、第九、第十の文は、そのことが容易に移行出来そうにないと予測される問題点を上げている。‘This will not be an easy transition. It will be said that boys under such a regimen will be soft and effeminate. It will be said that they will lose the manly virtues and will be destitute of courage. All this will be said by Christians in spite of Christ’s teaching. (この教育法は簡単な変遷の道を辿らないだろう。そのような制度の下で教えられる男の子は軟弱化し、男らしくなくなり、男らしい美德を失い、勇気が欠けてゆくと言われるだろう。こうしたことは全てキリストの教えがあるにもかかわらずキリスト教徒によって言われることであろう。)’ 次の第十の文、‘But, dreadful as it may appear, boys brought up in the old way grow into quarrelsome men who will find a world without war unbearably tame. (しかし、恐ろしいもののように見えようとも、これまでのやり方で育てられた男の子は大きくなって喧嘩好きな人になり、戦争の無い世界は耐えられないくらい退屈だと思うことだろう。)’ は、旧教育法に対する批判である。最後に結論として、第十一の文、‘Only a new kind of education, inculcating a new set of moral values, will make it possible to keep a peaceful world in existence. (新しい一連の道徳的な価値を教えこむ新しい教育が出て初めて平和な世界が存続することになるだろう。)’ は、平和的な世界の実現のための新しい教育の必要を訴えている。

以上は、第一の параグラフのキーセンテンスの説明部分を検討してみたわけであるが、結局のところ、キーセンテンスの補足の域をでない説明に過ぎないことがわかるのである。

次に、第二 параグラフのキーセンテンスはどう発展して言おうとしているのであるか。その第一の文、‘There will, after all, be plenty of opportunity for adventure, even dangerous adventure. (結局のところ、冒険、危険な冒険さえ、これを求める機会は数多くあるだろう。)’ は、他国の人々を殺害しなくとも男の勇敢さを示して余りある冒険の仕方やその機会は他に幾らでもあること、しかも、決して平和を掻き乱すことの無いやり方で求められるは

ずであることを提示していると考えられる。第一のパラグラフでは、平和的な世界観の樹立は男の勇敢さの弱体化を招くとの反発が予測されると説明があったわけだが、この第二のパラグラフでは、まさにそのことに対する答えとでも言うべき反証的な展開に転じている。次に続く説明の部分と考えて差し支え無い第二、第三の文、'Boys can go to the Antarctic for their holidays, and young men can go to the moon. There are many ways of showing courage without having to kill other people, and it is such ways that should be encouraged. (男の子は休日に南極にだって行けるし、青年は月にだって行けるわけだ。他国の人々を殺害する必要もなく勇敢さを示す方法はいろいろあるわけだし、そういうやり方こそがまさに鼓舞されなければならない。)' は、そのキーセンテンスを敷衍したものである。

次に、第三パラグラフでは、そのキーセンテンスは、'In the teaching of history, there should be no undue emphasis upon one's own country. (歴史を教えるに当たっては、自国のことを不当に強調し過ぎてはならない。)' であって、これは、具体的にどの方面において不当に強調し過ぎてはならないのかについては、判然としない面がある。そこで次の第二の文章にその説明を求めると、'The history of wars should be a small part of what is taught. (戦争の歴史は教えられる材料のほんの一部にしなければならない。)' とあって、歴史教育において重要視されなければならないのは、戦争のことよりももっと外にあるはずであると敷衍している。次に続く四つの文では、'Much the more important part should be concerned with progress in the arts of civilisation. War should be treated as murder is treated. It should be regarded with equal horror and with equal aversion. All this, I fear, may not be pleasing to most present-day educationists. (それだから、ますます重要な部分は、文明のうちの人文科学の方面における前進と関係がなければならない。戦争は殺害と同じように扱われなければならない。戦争は殺害に匹敵する恐怖と殺害に匹敵する嫌悪を抱いて扱われなければならない。こう言ったところで今日の教育者のほとんどを喜ばせることにはならないだろうと思う。)' とあるように、やや否定的ながらも戦争の歴史よりも文明の人文科学の方面の教育に重点が置かれるべきことを訴えておる。最後の第七の文では、'But, unless education is changed in some such way, it is to be feared that men's natural ferocity will, sooner or later, break out. (しかし、教育がそのような何らかの方法で変えられなければ、人間の生来備わった狂暴さは、遅かれ早かれ、爆発するだろうと不安に思われるのである。)' と言っているように、教育の転換がない場合の人間の本性の再発、ひいては戦争の勃発の危惧を述べている。

次に最後のパラグラフ、すなわち、第四のパラグラフに入るが、このキーセンテンスは、やはり、第一の文章である。今は第一と第二の文章が、'not only ... also ...' で関連づけられているので、キーセンテンスは、この第二の文章まで及ぶと考えた方が意味が取り易い。'But it is not only children who need education. It is needed, also by adults, both ordinary men and women and those who are important in government. (しかし、教育を必要とするのは子供達ばかりではない。普通の男女と政治に重要な役割を果たす人達の双方の大人達もそうである。)' でわかる通りに、このパラグラフは教育の必要とされる対象者は単に子供に止まらず、大人もまたそうであるということを訴えている。次の第三の文章、'Every technical advance in armaments has involved an increase in the size of States. (兵器の技術的な進歩があるときまって国家の大きさが増大してきた。)' は、この段階を見る限り、キーセンテンスとどのような関わりがあるのかについては、判然としないために、曖昧な気持ちを抱きながら次の第四の文章へと眼を移して行かざるをえない。'Gunpowder made

modern states possible at the time of the Renaissance by making castles obsolete. (ルネッサンスの時期に火薬の出現によって現代的な国家が可能となり、城という存在は時代遅れなものとしてしまった。) は、この第三の文章の具体例に過ぎないが、それでも第三の文章の存在についての懸念は未だ解決されていない。次の第五の文、‘What castles were at that time, national States are now, since weapons of mass destruction have made even the greatest States liable to complete destruction. (当時、城が果たしていた役割を今日では国民を代表する国家が果たしている。それも大量破壊の武器の出現によって最大規模の国家ですら破壊され尽くす傾向があるからである。)’ は、波及的に起こる城と国家の持つ役割の変化について敷衍的に論及されたものであるから、依然として説明部分の継続と受け止めることが出来る。次の第六の文、‘A new kind of outlook is, therefore, necessary. (それゆえに、新しい種類の展望が必要となってくる。)’ は、地域の統括の役割と戦略的な役割の双方を兼ねた重要性を持つ城というものの存在そのものが、火薬の出現によって国民的規模の国家の存在にとってかわらざるをえない事態となってしまったこの段階では、新しい展望すなわち見解、哲学というものが必要となってきたわけである。次の第七の文、‘Communities, hitherto, have survived, when they have survived, by a combination of internal co-operation and external competition. (社会はこれまでのところ国内的には協力しあい、国外的には競争しあう両刀使いをやって、生き残ってきたわけである。)’ は、その具体的な現れであって、国の内外の政策を述べている。しかし、それも、次の第八の文、‘The H-bomb has made the latter out of date. (水素爆弾の出現によって後者の国外的な競争は時代遅れとなってしまった。)’ でわかるように、その政策の破綻を来してしまっただけである。では、その政策に代わるものとして、何があるのかが次の関心となるわけだが、次の第九、第十の文、‘World-wide co-operation is now a condition of survival. But world-wide co-operation, if it is to succeed, requires co-operative feelings in individuals. (世界的な規模の協力が今や生き残るための条件である。しかし、それが成功するためには個人個人の協力的な気持ちというものが必要である。)’ は、そのことを示している。国家間の協力のみならず個人の協力精神が後者の国外的な競争にとって代わるものであると述べている。次の第十一の文、‘It is difficult to imagine a World Government succeeding if the various countries of which it is composed continue to hate and suspect each other. (世界政府を構成する様々な国々が互いに相手国を憎み、容疑をかけることを続ければ、世界政府が成功をおさめるなどと考えることは出来ない。)’ は、協力しあって生き残るのにも、予測される次の隘路があるということに触れており、次の第十二の文、‘To bring about more friendly feelings across the boundaries of nations to begin with, a matter of adult education. (より友情に満ちた感情を国家間の境界を越えてもたらしめるためには、先ず第一に大人の教育の問題である。)’ は、その隘路を打開するのにもやはり先に述べた通りに、大人の教育が必要であると論旨は元に戻りかけていることに気付くのである。次の第十三の文、‘It is necessary to teach both individuals and Governments that as one family mankind may prosper as never before, but as many competing families there is no prospect before mankind except death. (一つの家族としてなら人類は今までになく繁栄するだろうが、多くの競争しあっている家族としては、人類の将来には何ら見込みが無く、死ぬことしかない。ということを個人と政府の双方に教えることが必要である。)’ は、将来の見通しを述べることによって、是非とも大人の教育の必要性を強調しようとする言葉の敷衍である。最後の第十四の文、‘To teach this lesson will be a large part of the educative work of our scheme.

(この教訓を教えることが、われわれの計画を教育的に実現することに大きな位置を占めることだろう。) は、結論であり、その目的の実現に向かったの固い意志の表明でもある。

さて、以上によって、この長文の概要の掌握について論証を試みたわけであるが、果たして、明快に掌握することが出来たであろうか。今一度、振り返って見てみようと思う。

先ず第一パラグラフは全部で十二の文章から成り立っていて、その第一センテンスは言わずと知れたキーセンテンスであり、最後の第十二センテンスもこの第一キーセンテンスと同じような内容であって、言わば結論である。すなわち、平和的な世界の実現には、新しい教育の変革が必要である、ということである。その間にある他の文章については、その第二センテンスから第五センテンスまでは、教育の現況について触れてあって、勿論、否定的に論じていて、第六センテンスで、それに代わる新しい教育としては、一家族としての人間の考え方が教育されるべきであるということについて提示しており、第七センテンスから第十センテンスまでは、その提示する教育に対する反論として、男らしさ、男らしい美徳、勇気、勇敢さ等の喪失につながるとされるが、一方、第十一センテンスでは、教育の変革が無かった場合、つまり、従来の教育が継続される場合、喧嘩好きな男が、闘いの無い世界に耐えられなくなる男が、相変わらず育つ、といった具合にそれぞれの欠点について触れている。これが第一パラグラフの筋である。

第二パラグラフは、第一パラグラフで問題視された男の軟弱さ勇敢さの喪失について、その欠陥を補うものとして、冒険の機会を、平和的な世界でも、十分に求めることが出来ると例まであげて述べている。つまり、他国人を殺害しなくとも、勇敢さは幾多の面で出せるのであるから、これこそが鼓舞されるような教育が待たれると言っている。

第三パラグラフは、歴史の教育において、自国のことを不当に強調しすぎてはならず、戦争史は一部として扱うべきで、大きく比重を置くのは、文明のうち人文科学の方面こそがその題材とされるべきであると論じ、このような教育の変革が無ければ、男性の持つ狂暴さが再発する恐れがあると述べている。

第四パラグラフは、その第一と第二センテンスで、教育の対象は単に子供ばかりでなく大人もそうであると教育の広範な発展の必要性を論じている。次に続く文章は全てその理由と説明である。先ず理由を述べるために、第三から第七までの文章において、兵器の進歩と国家、城と国家のそれぞれの関係から、国家というものの新しい展望、見通しが必要となり、その具体的な提言として、社会の運営は国内的には協力しあい、国外的には競争することだとしたが、第八センテンスで、国外的な競争は水爆の出現によって不可能となったと論をすすめ、第九から第十三センテンスまでは、競争の不可能な事態では一体どうすれば良いのかを具体的に提示説明している。すなわち、競争を止めて世界的な規模で協力しあい、そのことを成功させるためには個人個人の協力心が必要であるとし、国家が相手国を憎悪したり、嫌疑をかけたりすれば、世界国家はなりたたないのであるから、そのためにも友情溢れる感情が必要であり、このことは単に子供の教育だけでは果たせないところであり、従って、大人の教育も必要であると結んでいる。

以上を仮に百字以内の要旨に纏めるとしたら、どうなるであろうか。「恒久的な平和の世界を希求するためには教育の大変革が必要である。勇敢さや冒険を求める機会はそれによって失われることはない。歴史教育では不当な扱いを避け、人文科学に力点を置くべきで、友情ある協力心を育て、殺害に繋がる闘争心を無くするためには、大人の教育も必要である。」これは、数えて見ると、百三十字からなる纏めであって、三十字がまだ多すぎる。条件を充たすためには、更に短縮する必要がある。「平和な世界を実現するには教育を大きく変えなければならな

い。そうしても果敢さは無くならない。偏重な教育は避け、大人も教育して協力する心を育てねばならない。」ここまで短縮すると、七十五字となり少な過ぎるので、もう少し省略部分を復活させなければならない。「平和な世界を実現するためには、現在の教育を大きく変える必要がある。そのようにしても果敢さや冒険心は無くなるものではない。歴史における偏重な教育は避け、大人も教育して、協力する心を育てなければならない。」一寸、手を加えると、これで丁度百字である。

さて、以上で英文の概要を掌握するための例文を使つての論証もしくは検証といったものを解説を加えながら試み、四例について検討を加えてきたのであるが、あとどれだけ英文が長文化しようとも、その概要を纏める要領といったものは、そう大きく変わるものではないのであるから、これからの英文読破の態度もかなり楽なものとなって行くと考えられます。

次は、以上の四例の外に更に実践的な例文を用意して、これらの概要を纏める要領について一層の錬成を積み上げて行きたいと考えております。今度は逐一各文章についての感懐もしくは流れに対する把握の仕方について、あるいは解説を加えたりすることは二義的にこれを扱うことにして、殆ど直截的にいきなり纏めて行く方法を取りたいと考えております。過程における考察、前後の脈絡等の考慮は、殆ど直観的に扱うために、表面に意識される問題としてではなく、影を潜め、大事な大筋を把握しようとする態度を終始とり続け、概要を掌握する本来的な姿勢で読破しようとしてみたいと考えております。そのことが実は本当の読書というものの姿勢であり、すべからく世の中の事象に対処し、これを掌握する簡潔な方法と相通ずるところであり、これを軽視することの出来ない大事な処世術とでも言ってよさそうなことでもあると考えてたい。

実践例 [1] 次の英文を読んで設問に答えよ。

Just why sleep is necessary still baffles researchers. It doesn't seem to be essential for health. Long periods of sleep deprivation may cause transient disorientation, but the effects aren't permanent. 'There's no evidence that sleeping poorly causes illness or death,' says Weitzman. Nor does sleep simply recharge energy lost during the day. If that were true, notes Charles Czeisler of Harvard, 'every waking minute would be made up for with a minute of sleep, like filling up a gas tank.' In fact, people who have been deliberately kept awake for three to ten days sleep no more than eleven to sixteen hours to catch up.

Some of the most promising new studies link sleep to the 'circadian' rhythms of the body's biological clock. The term, meaning 'about a day,' denotes the regular ebb and flow in the body's internal chemistry. During sleep, for instance, body temperature reaches its lowest point, while secretion of some hormones increases. Humans, and most animals and plants, follow a 24-hour day, simply taking their cues to sleep and wake from the earth's rotation.

But for reasons scientists can't explain, the body's natural cycle calls for a 25-hour day. In research at West Germany's Max Planck Institute, volunteers were kept in isolation from all time cues, such as clocks and sunlight, and permitted to set their own sleep-wake schedules. They tended to sleep every 25 hours. In working life, researchers conclude, people live by a mathematical clock and ---in ef-

fect--go to bed an hour earlier each day than their body clocks would prefer. On weekends people tend to follow the body clock, going to bed typically an hour later than usual on Friday night and two hours later on Saturday. On Sunday, they return to a conventional cycle for workday demands--and on 'blue Monday,' not surprisingly, they feel dull.

(2)

The puzzling 25-hour cycle leads to speculation. Some sleep scientists think it helps people adapt to changing seasons; some science-fiction addicts think it proves that human beings originated on another planet. The results of long-term experiments are stranger still. After two months volunteers live even longer days, going to bed every 36 or even 50 hours, but still sleeping one-third of their cycle. Every five day or so they would return for one day to a 25-hour cycle. In recent studies, Czeisler, Weitzman and Martin C. Moor-Ede of Harvard found that even when the volunteers were observing longer day, peaks and valleys in body temperature conformed to the 25-hour rhythm. More interestingly, they also observed the length of time a subject slept depended on whether he was at the high or low point of his temperature when he fell asleep, and not on how long he had been awake. If he fell asleep at the low point, he might sleep seven hours, if sleep began at the high, he tended to sleep twice as long. Experts still don't know why sleep varies according to body temperature. But the findings confirm that sleep isn't simply restorative. Points out Montefiore's Pollak: 'When we sleep matters, not just how much.'

(九州大学・昭和57年)

以上の問題に対して、設問が六つ出されており、その内の第二問で、「下線部(2)の理由を日本語100字以内で説明せよ。ただし句読点も字数にかぞえる」と、その内容の理解力をただそうとしているが、しかしながら、結局は論旨を問う問題になってはいない。ところで、この論文の論旨を纏めてみると、これは四つのパラグラフから成り立っており、従ってキーセンテンスは四つあることになる。ただ四つ目のパラグラフは多少ややこしさがあるので、これをどう扱うかが、この論文の論旨の纏め方のポイントとなるであろう。「睡眠が何故必要なのか、研究者はいろいろ研究しているにもかかわらず依然としてわかっていない。一番有望な新研究の中で、睡眠というものをも身体の生物学的な時計の規則正しい回復リズムと結び付けたものがあるが、実際は、身体の自然なサイクルは一日25時間を要する。摺りあわない25時間のサイクルによって幾多の推測が生まれてくるが、数多くの調査研究によると、結局睡眠は元気を回復させるものではないことがはっきりしている。」四つ目のパラグラフは、キーセンテンス以下は、推測、つまり、それによる調査実験の具体的な説明の羅列であり、そのどれもが内容としては重要であるはずであるが、論旨の掌握の点からすると、割愛しなければならない部分ではある。ところで、最後の方に、'Experts still don't know why sleep varies according to body temperature. But the findings confirm that sleep isn't simply restorative. (何故睡眠が体温によって変わるのか、専門家は未だにわかっていない。しかし、研究による発見によってはっきりしていることだが、睡眠はただ元気を回復させるものではない。)'とあるが、この部分が無視出来ない結論めいた要素を持っていることに気付く。しかし、その内の前者の文章は未だ説明の部分に属すると考えて良いから、これを更に削除して、後者の文章を取り上げることにして、論旨の結びに置くことにするわけである。

以上の論旨の纏めは、問題には設問として、何字以内に書き表わせといった要求が無いことから、100字以内とか、150字以内とか、200字以内とかに纏めることは、むしろ難問に属するのではないかと考えられる。何故なら、量的に字数が多い文章であることの外に、重要な研究内容の紹介が具体的で、かつ、その数が多いことによると言っている。で、あえてこれを纏めてみたわけであるが、その字数を数えてみると、なんと、200字に納まっている。これ以上字数を切り詰めることは、およそ意味のないことになるので、これ以上はしないが、一体に何故論旨を短文に縮小してまでその骨子を掌握しようとするのか、そのことの本質的な考察がなされていないままに、ことの技術だけを追求し、熟練しようとしてはならないと考えていることは先刻承知しているところである。ただ、問題を要求する側の立場から考えれば、そのように字数を限定して、その有限の条件の中で応答させることも、調査吟味する便宜に繋がるし、その能力を簡潔に計ることが出来るだろうから、それはそれで結構なことではあると考えている。大事な点は、字数の制限を外して、とにかく、読者その人の思うままに、しかも正確に公正に判断して、纏めることが出来れば、それで良いということである。今扱っているのは、あくまでも字数の制限が設定されているその条件下でどのようにして論旨を纏めるかということを取っているのである。そのことは弁えているつもりではある。

実戦例〔2〕次の英文を読んで(1)～(4)の問いに日本語で答えよ。

The rhythms of Japanese people's social lives are probably more influenced by seasonal rhythms than most sociologists have intimated. The close relationship between people's lives and the year's life is typical of wet, agricultural, non-Christian civilizations like those of Bali or those of Polynesian islands where seasonal festivals are not distinctly separated from human celebrations of births, coming-of-age ceremonies, or weddings. In both of these civilizations the human cycle is felt to be deeply connected with the agricultural cycle and the cosmic cycle noticeable in the seasonally changing constellations. Surely, part of Japan's isolation from the industrialized, western world is a direct consequence of this trace of an older, more agrarian mode of life tied to the seasons.

The Japanese feel the arrival of summer when, walking down a street, they come across a group of high school girls in their fresh summer school uniforms. The annual high school baseball tournament, which for them is almost a national event celebrating youthful physical purity, would certainly lose an essential part of its charm and meaning if it were not accompanied by the stifling summer heat. Japanese beaches are suddenly packed with people and then, suddenly, they are empty. Japanese corporations normally change the packaging of their products four times annually to stimulate seasonal demand. And sensitivity to the seasons and seasonal change is, of course, one of the skills valued in Japanese society, as seen, for example, in

haiku.

Japanese life is governed by a set of internalized calendars which set a standard age for a woman to marry; for a corporation employee to be posted overseas; for a small shop owner to retire and spend his idle hours with bonsai. And those who, for one reason or another, exceed the time for that activity are regarded as having fallen from the expectations and the norms of society. The seasons are in effect a set of unwritten laws in Japan.

Traces of the older relationship between natural and human rhythms are surely with the Japanese, and they seem to be responsible for many of the problems of post-war industrialized Japan. Many Japanese couples move from the season of childhood dependency to "adult" marriage without the intermediate stage of self-supporting independence, either alone or with someone of the opposite sex. The Japanese male of ten exhibits a childish dependency upon some "mother" figure, as a consequence of not having experienced a "season" between childhood and marriage. The promotion of salaried men, at least up to a certain level, comes more or less automatically, without their recognition of having done anything to bring it about. Because their progress is determined by age (life's season), many salaried men come to feel that their lives are governed by something outside themselves. And just maybe, the Japanese unwillingness to authorize the pill as a readily available birth-control method in an unconscious resistance to artificially interfering with the woman's internally determined, bodily seasons. (東京外国語大学・昭和60年)

この問題に続く四つの設問の内容について吟味してみると、それぞれ細かな事柄について質問をしているのであって、それこそ細心の注意を払って対処しないでは応答出来ない高い格調を維持した問題にしたてである。しかし、細心の注意を払って読んでも、その概要を無視して細かな事柄について設問することについては、多少の問題が残ることが残念なことではあるが、そのような性質の問題も時によってはありうることもあることを考慮すれば、これまた、どうしようもないことでもあるので、その是非について議論することについてはこの辺りで打ち止めすることにする。さて、要はその設問とは関係なくここでは論旨を如何に掌握するかということについてわざわざ選択してあげた問題であるから、折角の問題とは別の扱いをすることによる外なく、そのことに細心の注意を払って試みることにする。

第一パラグラフから、最後の第四パラグラフに至る四つのキーセンテンスをここに列挙すると、「日本人の持つ社会生活のリズムは、多分、季節的なリズムに影響されるところがあって、社会学者の暗示したものよりずっと大きいものであろう。日本人が夏の到来をそれとなく知るの、街を歩くと、一斉に眼も目映い夏服に着替えた一群の女学生に遭遇する時である。日本人の生活は、一連の内面化されたカレンダーに支配されていることであって、そのカレンダーはさまざまな立場の人々のために標準となる年齢を定めている。自然のリズムと人間のリズムとの間にあるずっと昔からの関係の跡を辿ってみると、それは確かに日本人と抜き差しならぬものがある。その関係の痕跡は、戦後の工業化された日本の抱える問題の多くとは切り離せないものとなっている。」となるが、総じてその字数は、列挙しただけのことがあって、つまり、なんら省略とか削除、そしてそれによる短縮とかいった操作をしないだけのことはあって、302字にも達している。それは、通常の纏める字数には到底及ばない程に多過ぎるのである

から、後で更に短縮することにしようとするが、これで果たしてその論旨を纏める方向で列挙した
ことになっているのか、そのことの方を今は更に検討してみよう。

先ず第一に、第一パラグラフであるが、以上の纏めだけでは、その結果として生じた日本の
孤立化までは論及されないことになる。このことを後で加味されなければならない。その第二
パラグラフは、やはり、そのパラグラフの最後の文章でこそ結びとしての役割が見られるので
あるから、これもまた加味する必要がある。ここまで見てくると、この長文の纏め方には独特
の方法を取らない限り本当の意味で論旨を掌握したことにならないのではないかと予測させる
要素が感得されるのである。すなわち、各パラグラフの最初の文章と最後の文章とを重ねて掌
握しないと筋をつかんだことにならないのだから、そしてその両者の間に置かれている文章は
説明や敷衍に過ぎないから、それらは省略可能であるから削除することとするのであるが、こ
れからのパラグラフの検証についてもそんな注意を払いつつ検討するといった姿勢を取らざる
をえないと考えるところである。本当にそうなのか、そうでないのかは、これからそれぞれに
当たってみないとわからないことではあるが。さて、第三のパラグラフであるが、その最後の
文章がこれまた最初のキーセンテンスの言い直しであることに気付くのであるが、これは、あ
くまで言い直しの程度であるから、そんなに重要視するには及ばないと考えて良い。最後の第
四のパラグラフであるが、これは、さすが、キーセンテンスの後の文章は全て説明と敷衍に過
ぎないことがわかる。しかし、最後の文章のピル・アレルギーは、その波及する良い例として
あげるのに面白い部分であることが、少し捨て去るには名残惜しい面がある。しかし、論旨に
は関係がないことをここにおいて厳しく意識しなければ、纏めの文章は悪戯に長くなる外ない
ことを忘れてはならない。そうすると、第一、第二の各文章についてのみ、その最後の文章が
今一度検討の対象として削除出来ない部分と考える外は、第三、第四の文章までは、その考え
は及ばないとみて良いことがわかる

そうすると、結局、この長文の論旨は、「日本人の社会生活のリズムは、季節のリズムに影響
されており、これは日本の国際的な孤立を招いている。この季節感、路上の一寸した変化にも
敏感に反応し、その技量は日本では高く評価されている。日本人の生活は、季節に左右され
たカレンダーに支配されており、自然のリズムと人間のリズムとの間の昔からの関係は日本人
に纏わり付いている。それが、戦後の工業化された日本の抱える問題とも無関係ではない。」と
なるが、その字数を数えると、190字である。これであれば、200字以内で纏めてみよとい
った問題に対しては恰好の答えとなることになる。すると、問題は、字数を削減する最後の手段
は、やはりキーセンテンスだけを抽出して、それらを訳することだけでは完全にはならないと
いうことであって、もしも問題に字数の厳しい制限が加えられていれば、その訳文自体の短縮
化も検討される必要があるということである。

実戦例 [3] 次の文を読んで、下記の問いに答えよ。

Black holes are so much a feature of modern developments from Einstein's theory
that it comes as a surprise to learn that their existence was predicted by eight-
eenth-century astronmers, on the basis of Newtonian ideas about gravity. Of course,
those early idears owed nothing to the concept of bent spacetime, and they rested
upon a fundamental mistake about the nature of the Universe, the assumption that
particles of light --- photons --- could be slowed down by gravity, just like material
particules. We now know that photons always travel at the same speed, the speed of

light. But credit must be given to those who deserve it---two centuries ago scientists were just as intelligent as modern scientists, simply a little less well informed than their spiritual heirs. And they certainly knew how to take a theory to its logical conclusions.

To the informed reader today, the fact that our ancestors developed a theory to describe what we would call black holes may not seem all that surprising. After all, many books and articles, both popular and academic, have now told the story of how the great French mathematical astronomer Pierre Laplace mentioned in his book, published in 1796, that an object with a diameter 250 times as great as that of our Sun, and with the same density throughout as the average density of the Earth, would be invisible to outside observers because light could not escape from its gravitational pull. But this is not the end---or rather, the beginning---of the story, for it is far less well known today that although Laplace reached this conclusion independently, he had in fact been preceded by thirteen years by the work of the much less well-known English physicist John Michell. As far as we know, it is Michell who should be credited with the first published calculations describing black holes; Gary Gibbons, of the University of Cambridge, has gone so far as to describe Michell as "the man who invented black holes." (早稲田大学・〔政経〕・昭和61年)

このエッセイのパラグラフは、二つあるから、勿論そのキーセンテンスは二つあることになる。しかし今回のエッセイは、その内容がブラックホールの存在説の発祥について歴史的に多少振り返っている程度のものであるから、余り関心と呼ぶものではないように思われる。しかし、折角取り上げたものであるから、その論旨を一応纏めてみなければならない。

「ブラックホールの特色をみると、アインシュタインの理論から近代的に発展を遂げたものであるが、すでに18世紀の天文学者が、ニュートンの引力の法則に基づいてそのブラックホールの存在を予言していた。ブラックホールと呼ばれるものを述べる理論を昔の人がすでに発展させていたという事実は、今日の学識者にとっては、それほど驚くべきことではなさそうである。」と一応纏めてみたが、その字数を数えてみると、168字である。それぞれのキーセンテンスの次にある残余の文章はそのキーセンテンスの説明の部分に過ぎないことは明白であるから、これを取り上げて更に細かく言及する必要は無いと考えられる。問題は以上の纏めでその字数がやや多すぎるということであるから、これを更に短縮する必要がある。「ブラックホールは、アインシュタインの理論から近代的に発展したが、それはニュートンの引力の法則に基づいてすでに18世紀の天文学者によって予言されていたことは周知のことである。」というふうにして、第二のキーセンテンスを思い切って圧縮すると、その字数は85字となる。何故第二のキーセンテンスをこのように圧縮出来るのかについてであるが、多くの本や雑誌にすでに紹介されるところが大であるということとを考慮すると、それは結局周知を促すことに触れている外ないわけである。

以上で今年は打ち切りたいと思うので、残りの部分は来年に回したいと考えている。来年はこの実戦例を更に数十例上げて、発展的に、多角的な検証の視点を設けてみたいと考えています。(未完。長引いた冷夏の後に連日の酷暑に悩まされた日々であった。)